生きるんだポンちゃん

中村ただし　文・写真

生きるんだポンちゃん

中村ただし 文・写真

旺文社

装幀・レイアウト　**SunMomoki**

十月は　いぬねこ病院の　医者に　とって一ばん　いそがしい　時です。きょうけんびょうと　いう、おそろしい　病気に　かからないよう、一日に　三百頭もの　いぬに　よぼうちゅうしゃを　しなくては　ならないからです。

十月十日。
その　日も　わたし
は　よぼうちゅうしゃ
に　いそがしく、お昼
ごはんを　食べたのは
三時すぎでした。
ほっとして、お茶を
のんでいた　時です。
「先生、先生……」
と　よぶ　声に、げん

かんへ　出てみると、
若い　男の　人が　た
ぬきを　かかえて　立
っていました。
「わたし、小林と　い
う　ものですが、先
生、おねがいです、
こいつを　助けて
やってください。」

それは　生まれて　一年ほど　した　子だぬきでした。目は　あけていても　死んだように　動きません。

「車に　はねられていたんです。早く　みてやってください。」

小林さんは　まるで　じぶんの　子どもがけがでも　したように　ひっしです。

「おたくで　かっている　たぬきですか。」

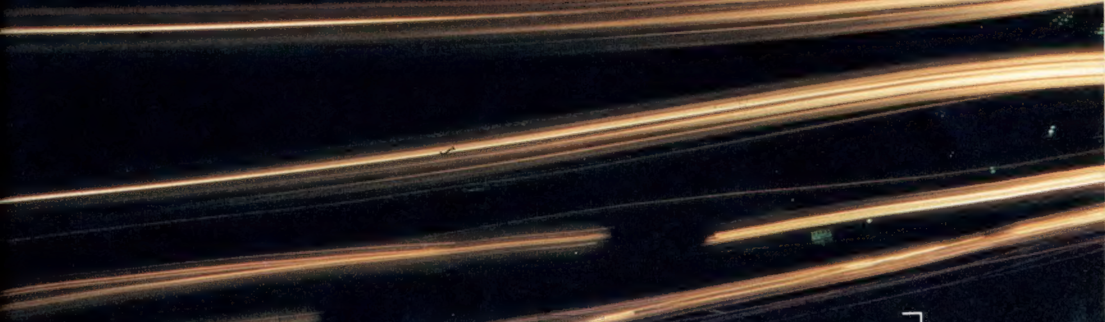
「いいえ、道路で　たおれているのを　つれてきたんです。」

「とにかく　中へ　はいって、くわしく　ようすを　きかせてくださいませんか。」

わたしは　いきを　はずませている　小林さんを　おちつかせるように　いいました。

「ぼくは　長きょりトラックの　運転手なんですが……」

小林さんは　ぐったりしている　たぬきを　しんさつ台に　ねかせると、その　時の　ようすを　話しはじめました。



「おとついの　八日の　こと
です。ぼくは　いつものように　トラックに　にもつを　つんで、国道四十一号線を　名古屋から　富山に
むかいました。夜の　国道は　車も　少なく、快調に
とばして、十二時ごろ、岐阜県加茂郡の　川辺町に
さしかかった　時でした。

ポンちゃんをはなした山
とやま
かわべちょう
みのかもし
なかかわべ
えき
ポンちゃんが
くるまにはねられた
ところ
ぎふけん
ぎふえき
みのおおた
えき
たかやまほんせん
あいちけん
こくどう41ごうせん
こばやしさんのトラック
おわりいちのみや
めいしん こうそく
ちゅうおうこうそく
かすがいし
ポンちゃんが
にゅういんした
なかむらせんせいの
びょういん
とうかいどうほんせん
かちがわ
とうめいこうそく
なごやし
なごやえき
しんかんせん
とうきょう

（おやっ？）

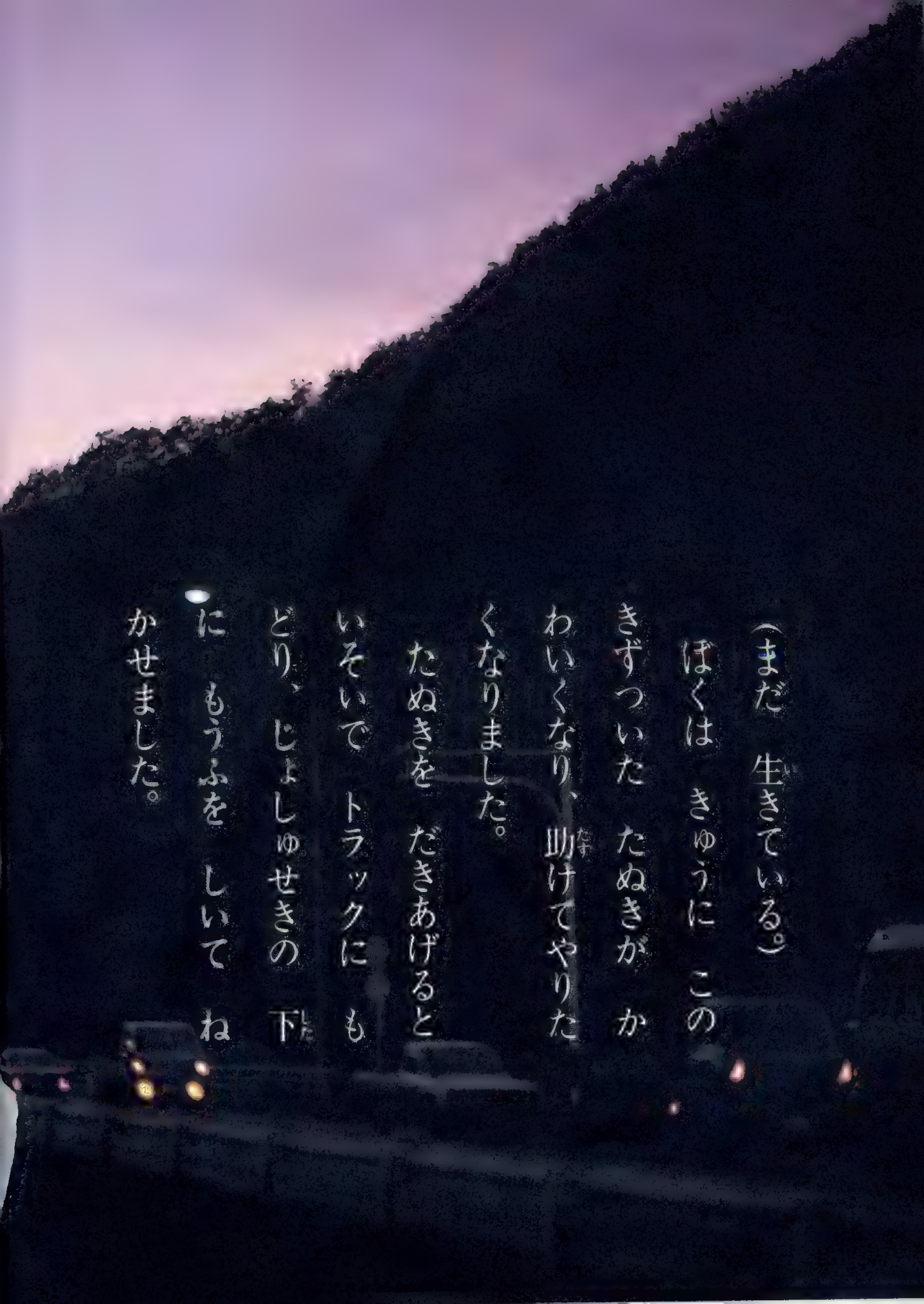
ぼくは　ハンドルを　にぎりなおしました。前を　走っている　車が、　なにかを　さけるように　右へ　カーブを　きったのです。

（どうしたんだろう。）

と　思う　まもなく、　ヘッドライトの　明かりの　中に、　いぬのような　ものが　うかびあがりました。

ぼくは　あわてて　ブレーキを　ふみ、　車を　おりてみました。

みると　小さな　たぬきでした。車に　はねられたらしく、死んだように　動きません。と、ふいに　たぬきが　顔を　あげて、キラキラと　光る　目で　ぼくを　みつめました。



（まだ　生きている。）

ぼくは　きゅうに　この
きずついた　たぬきが　か
わいくなり、助けてやりた
くなりました。

たぬきを　だきあげると
いそいで　トラックに　も
どり、じょしゅせきの　下
に　もうふを　しいて　ね
かせました。

（がまんするんだ。
死ぬんじゃ　ないぞ。）
そう　たぬきに　いいきかせながら、ぼくは　トラックを　走らせました。
つぎの　朝、富山に　ついて　にもつを　おろすと、さっそく　たぬきを　だいて　動物病院を　さがしました。

ようやく　一けんの　病院を　みつけ、中へ　とびこもうとしました。
ふと、ぼくは　心配に　なったんです。
（お金は　どのくらい　かかるんだろう。
もし　助からないと　いわれたら……。
だれかに　そうだんしたほうが　いいかもしれない……）
ぼくは　そのまま　トラックに　もどると名古屋への　帰り道を　むちゅうで　走ってきました。」

小林さんの　話を　聞いている　うちに、
わたしは　むねが　いっぱいに　なりました。
（なんて　心の　やさしい　人だろう。人が
たおれていても　しらん顔で　通りすぎて
いく　人が　多いというのに。わざわざ
トラックを　とめて　たぬきを　ひろって
くるなんて……。よし、小林さんの　ため
にも　この　たぬきを　助けてあげよう。）
わたしは　小林さんに　いいました。

「わかりました。しゅじゅつを　してみましょう。お金は　いりません。ただ、一つだけ　じょうけんが　あります。ひと月たって　元気に　なったら、もとの　山へかえしてやって　ほしいんです。動物たちに　とって、自然の　山は　最高の　病院なんです。」

「いいですとも。ぜひ　おねがいします。」

小林さんの　顔が　ぱっと　明るく　なりました。

「おい、よかったナ。いたくても　がまんするんだぞ。」

小林さんは　たぬきの　頭を　なでると、なんども　おれいを　いいながら　帰っていきました。

さて、しゅじゅつを　ひきうけた　ものの、ほんとうに助かるか　どうか、わたしは心配でした。

わたしは　これまで　十八年間、いぬねこ病院の　医者を　してきましたが、山に　すんでいる　野生の　動物を　しゅじゅつするのは　はじめてでした。人に　かわれた　ことの　ない　たぬきでは、いつ、どんな　ことが　おこるかも　わかりません。

たぬきは　いぬと　おなじ　なかまの　動物で、耳の　まるいのが　とくちょうです。山では　ねずみ、へびなどを　食べ、かきや　ぶどうも　大こうぶつです。

ひるの　あいだは　あなの　中で　ねむっていて、夜に　なると　動きまわります。

（そんな　野生の　たぬきに　しゅじゅつが　できるだろうか。ますいが　きかないと　いうことも　考えられる。）

その　夜、わたしは　ねむれませんでした。

つぎの　朝、まちきれない　気持ちで　とびおきると、助手の　杉浦くんや　妻に　手つだってもらって　しゅじゅつの　じゅんびに　かかりました。

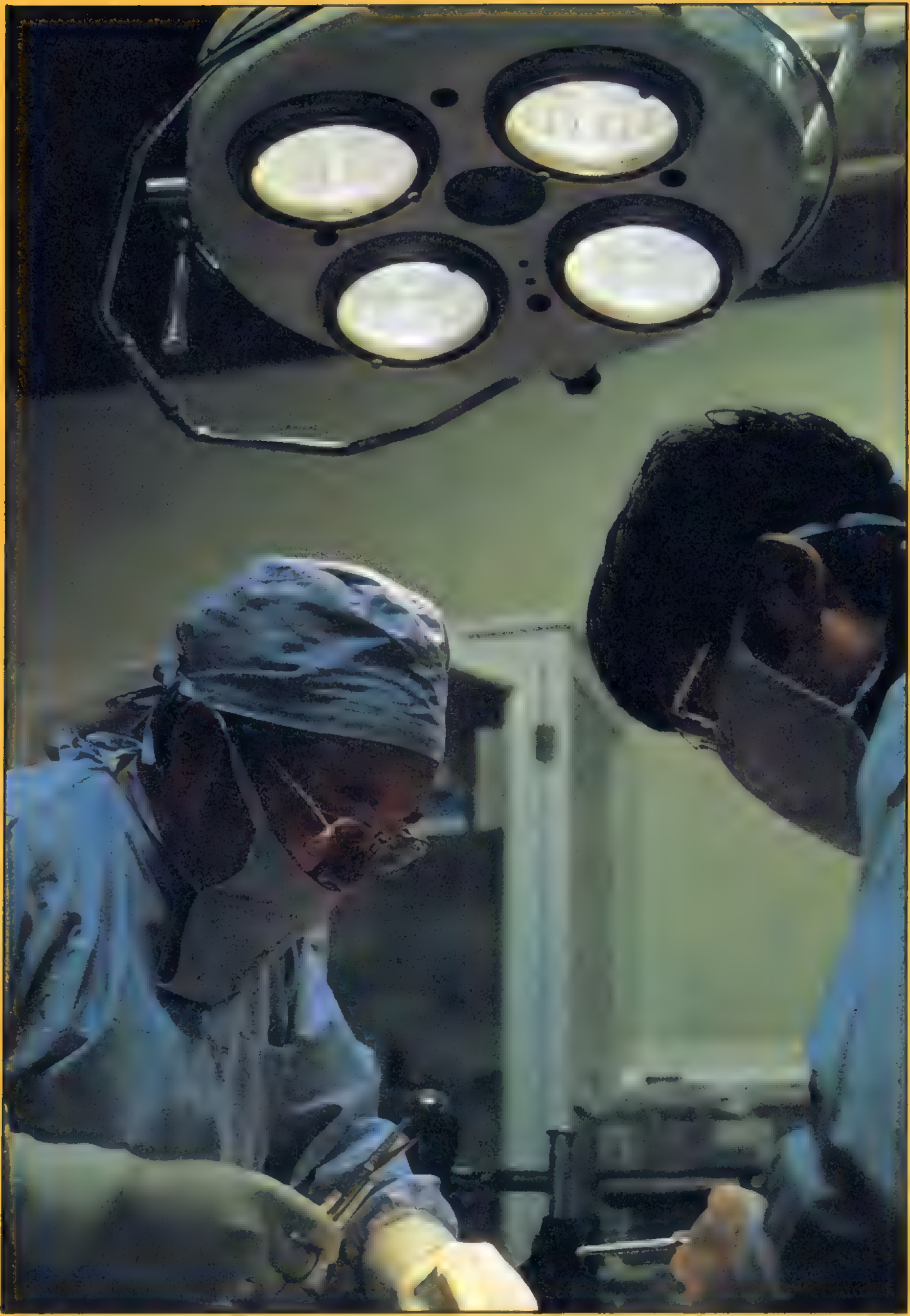
まず、たぬきを 小さな おりに 入れ、上と 下、右と 左から 太い ぼうを さしこみ、動けないようにして ますいやくを ちゅうしゃしました。動物だって 人間と おなじです。少しでも いたくないように しゅじゅつをしてやらなければ なりません。」

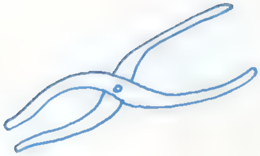
ちゅうしゃを して 五分も たつと、たぬきは 舌を 出し 目を つむりました。ところが 手を 出して たしかめようと すると、ひょいと 頭を あげるのです。

しかたなく、こんどは　ガスますい
を　かけると、ようやく　ねむりこん
で　くれました。
すぐに　レントゲンを　とりました。
「これは　ひどい！」
写真(しゃしん)を　見(み)るなり、杉浦(すぎうら)くんが　声(こえ)
を　あげました。
おしりの　ほねが　三かしょ、右(みぎ)の
ももの　ほねが　一かしょ、ポッキリ
おれているのです。

（これでは　とても　助かりそうも　ない。
この　まま　くすりで　死なせてやるほう
が　しあわせかもしれない。）
「どう　しますか、先生。」
杉浦くんも　おなじ　ことを　考えたので
しょう。
わたしは　まよいました。でも、きのう
うれしそうに　帰っていった　小林さんの
ことを　思うと、とても　そんな　ことは
できません。

「やるだけ　やってみよう。」
わたしは　じぶんを　元気づけるように
いいました。
杉浦くんが　バリカンで　毛を　かりとった　はだに、メスを　入れました。
ほねを　おった　時、かわの　下に　たまっていた　血が　どっと　あふれ出ました。
きりひらいた　ところから　手を　つっこんだ　とたん、おれた　ほねの　あいだに　ゆびが　はさまってしまいました。





かんしで　やっと　ほねを　ひき出し、ピンを　通す　ための　あなを　あけました。この　あなに　ピンを　通して　ほねを　つなぎ合わせるのです。

とつぜん　たぬきの　こきゅうが　とまりました。

「杉浦くん、人工こきゅうだ！」

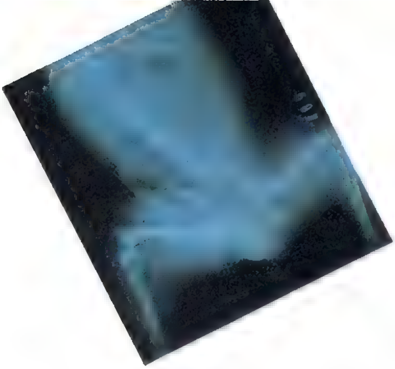
杉浦くんは　さんそバッグで　すぐに　人工こきゅうを　くりかえしました。

しばらく　すると、たぬきは　いきを　ふきかえしました。
わたしは、ふたたびしゅじゅつを　つづけました。
わたしも　杉浦（すぎうら）くんも　きんちょうで　あせびっしょりでした。

つなぎ合わせた　ほねを　もとの　ばしょに　もどすと、また　つぎの　ほねを　とり出し　つなぎ合わせるのです。その　たびに　たぬきの　こきゅうが　とまりました。

（こんな　しゅじゅつ　ひきうけなければよかった。）

あまりの　苦しさに、わたしは　なんどとちゅうで　なげ出そうと　思ったでしょう。でも、たぬきだって　ひっしに　がんばっているのです。



おもい出したように　いきを　ふきかえす
たぬきを　見ながら、わたしは　心の　中で、
（もう　少しだ、もう　少しだ！）
と　いいつづけていました。

やっと　きず口を　ぬいおわった　時、しゅじゅつを　はじめてから　四時間が　たっていました。

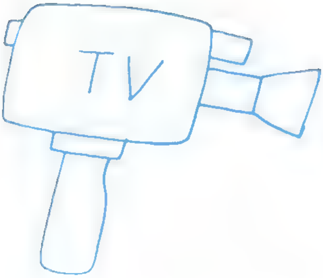
ますいの　ガスを　切り、きれいな　空気を　おくってやると、たぬきは　すうっと頭を　あげました。

黒くて　大きな
目が　キラキラと
光りました。
それは、野生の
動物だけが　もっ
ている　うつくし
い　かがやきでし
た。

「助かったらしいぞ、杉浦くん。」
「先生……」
そう　いったきり、ふたりは　おたがいの顔を　みつめ合っていました。
杉浦くんは　こぼれそうに　なる　なみだを　ひっしに　こらえているようでした。
しゅじゅつの　あいだ、なんども　わたしの　ひたいの　あせを　ふきとって　くれた妻も、目がしらを　おさえていました。

しゅじゅつを　して　二日めの　ことです。
「先生、早く　きてください！」
杉浦くんの　こうふんした　声が　入院室から　きこえてきました。
（まさか……死んでしまったのでは……）
わたしは　大いそぎで　入院室に　かけつけました。
すると　どうでしょう。たぬきが　立っているのです。右足を　かばうようにしていますが、左足は　しっかりと　ふんばっています。

（自然の　中で　生きる　動物は　なんて
強いのだろう。）
十日ぐらいは　動けないだろうと　思って
いた　わたしは　おどろいてしまいました。
「たぬきは　人を　ばかすと　いいますから
あしたに　なると、また　ひっくりかえっ
ているかも　しれませんよ。」
そんな　杉浦くんの　じょうだんを　聞き
ながら、あらためて　しゅじゅつの　うまく
いったことを　よろこびました。



わたしは　この　たぬきに〝ポンちゃん〟と　いう　名まえを　つけました。

ポンちゃんの　ことが　たまたま　新聞にのると、全国の　人から　はげましの　手紙や　電話が　きました。動物の　医者としてあたりまえの　ことを　しただけなのに、なんだか　テレくさい　気持ちでした。でも、ポンちゃんの　ことを　心配してくれる　人が　こんなに　いてくれるのかと　思うとうれしくなりました。

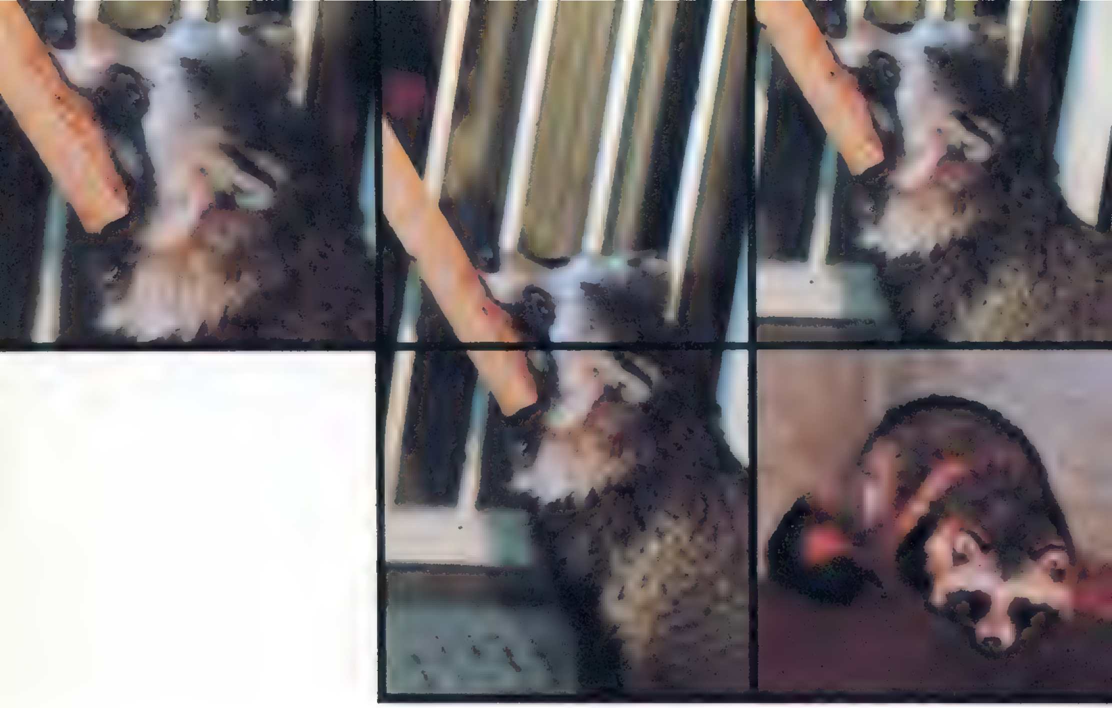
手紙の　中には　小さい　子どもからの　ものも　ありました。

『おじさん、ポンちゃんを　助けてくれて　ありがとう。ポンちゃんは　もう　元気に　なりましたか。少しだけど　わたしのおこづかいを　おくります。これで　なにか　おいしい　ものを　かって　ポンちゃんに食べさせてあげてください。』

いっしょうけんめい
かいた　手紙の　字を
見ているうちに、わたし
の　むねは　いっぱいに
なってしまいました。
（この　小さい　おとも
だちの　ためにも、ポ
ンちゃんを　もと通り
の　からだに　してや
らなくては……）

三日めに　なると、ポンちゃんは　入院室の　中を　クルクルと　歩きまわり、とりにくや　ドッグ・フードを　もりもり　食べるようになりました。

でも、食べている　ところは　けっして　人には　見せません。人が　はいっていくと　すぐに　やめてしまうの

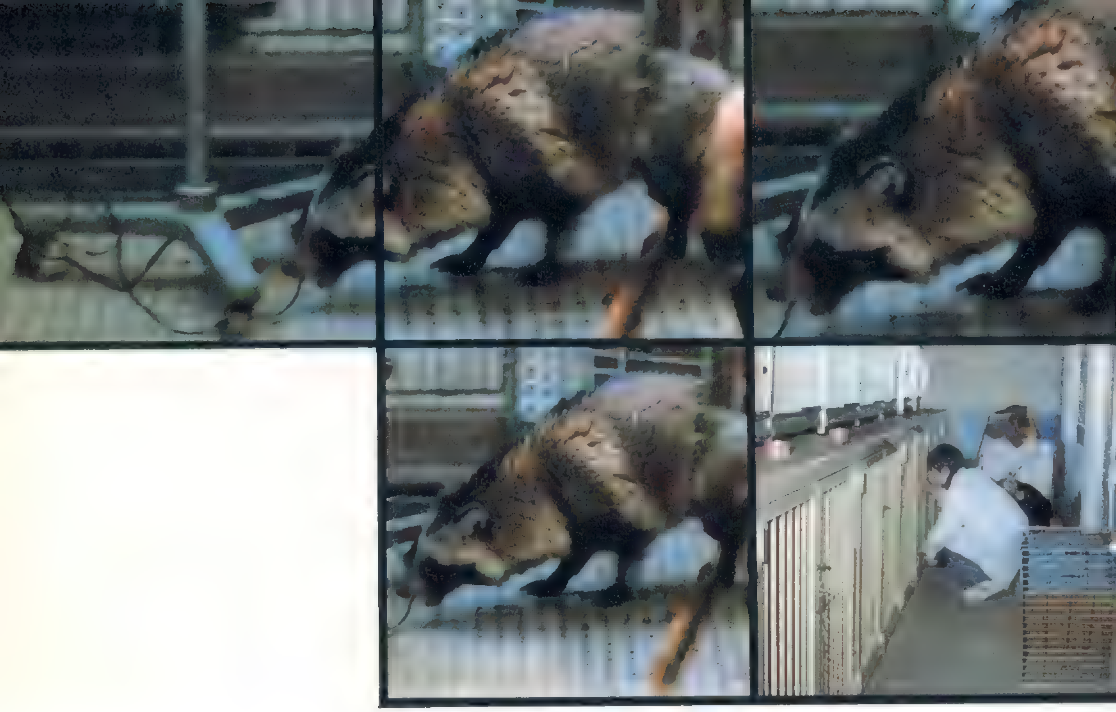


です。
日が たつに つれて ポンちゃんの 動きは はげしくなりました。やさしそうな顔は していても、山の 中で 生きてきた たぬきです。なんとか にげ出そうと するのでしょう、するどい 歯で 入院室の 床の 木は ボロボロに なっていました。

（あんなに　あばれると、つなぎ合(あ)わせた　ほねが　はずれてしまう。しずかに　させておく　方法(ほうほう)は　ないだろうか。）

わたしは　ふと、たぬきは　ひるまは　じっとして　動(うご)かないことを　思(おも)い出(だ)しました。

そこで、夜(よる)おそくまで　電(でん)とうを　つけておくことにしま



した。
それでも、あんまり　しずかだと　しんぱいに　なり、夜中に　おきていって　明かりを　けしてやりました。
すると　ポンちゃんは　カラン　コロンと　食べもの入れを　ころがし、シー　カリカリ　シー　カリカリと　床を　かみはじめます。

入院十日め。

ポンちゃんを　小さな　おりに　入れ、はじめて　外へ　出してやりました。

ポンちゃんは　うれしそうに、

「クウン　クウン」

と　なきながら、おりの　中を　いったりきたりしました。でも、手を　出したり　すると、ものすごい　いきおいで　かみついてきます。

わたしは　じっと　かんさつしていました。

と、わたしは　ポンちゃんの　ようすが少し　おかしいのに気がつきました。

左足は　なんともないのですが、右足がねじれているように見えるのです。それに右足を　かばうように歩いています。

（いのちが　助かったと　いっても、こんな
ふじゆうな　からだでは、えものを　つか
まえることも　できないし、きびしい
自然と　たたかうことも　できないだろう。）
わたしは　いても　たっても　いられなく
なりました。
「杉浦くん、もう　一ど　しゅじゅつだ。」
わたしは　ポンちゃんを　しゅじゅつ室へ
はこびこみました。
ますいを　かけ、レントゲン写真を　と

ってみると、右足の　ほねの　つなぎ合わせたところが　かさなって　見えます。

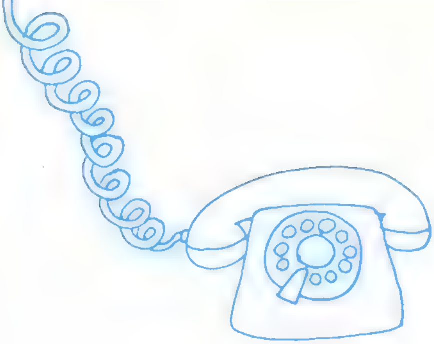
　そこで、ピンの　かわりに、こんどは　プラスチックの　ぼうで　つなぎ合わせました。

　しゅじゅつが　おわって　三日ほど　すると、ポンちゃんは　また　立ちあがり、ゆっくり　歩きはじめました。右足を　かばうようには　していますが、ちゃんと　両足を　つかっています。わたしは　ほっと　むねを　なでおろしました。

（この　まま　なおって　くれれば、こんどこそ　もと通りの　からだに　なれる。あと　ひとがんばりだ。）

わたしは　その　ばんから、夜どおし　おきていて、電とうを　つけたり　けしたりすることにしました。こうすれば　てきとうに　運動させたり　休ませたり　することができるからです。

わたしは　ポンちゃんが　入院してからほとんど　ねむっていませんでした。

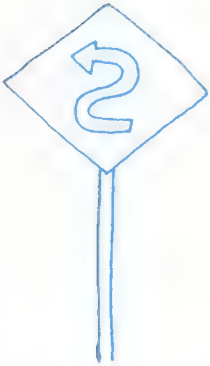


そんな　ある日、
「先生、ポンちゃんの　ようすは　どうですか。おみまいに　いってやりたいのですがなかなか　時間が　とれなくて。」
小林さんからの　電話でした。
「だいじょうぶです。かならず　元気な　ポンちゃんに　してみせますから、安心していてください。」
わたしは　できるだけ　明るい　声で　こたえました。

長きょりトラックの　運転は、きつい、きけんな　しごとです。つかれた　声を　出して、小林さんを　心配させることは　できません。

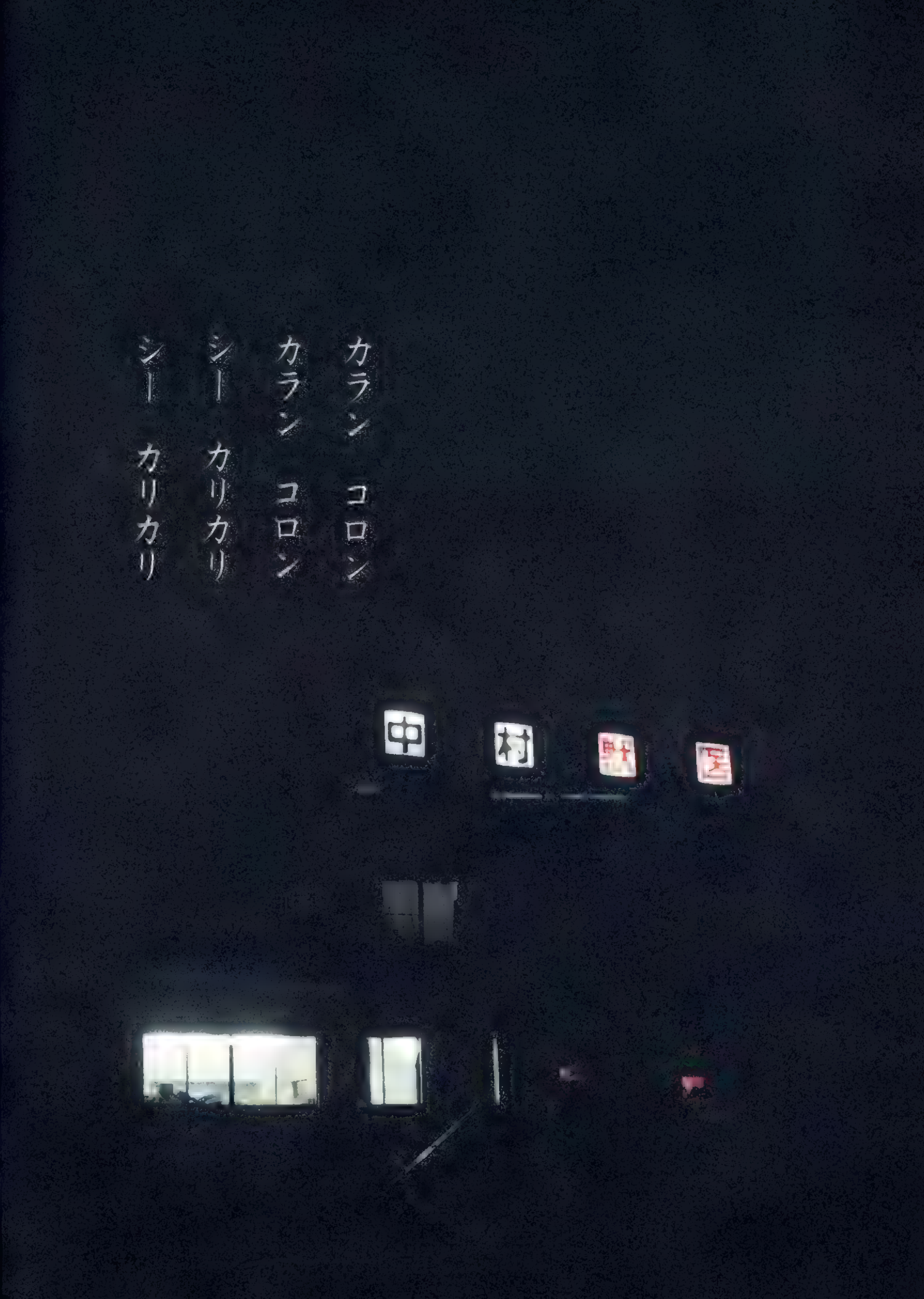
「そうですか。でも、早く　会いたいなあ。」

その　声を　聞いていると、元気な　ポンちゃんに　会った　時の、小林さんの　顔が　目に　見



えるようで、わたしも　元気を
とりもどしたものでした。
　なん日か　たつと、ポンちゃん
の　足は　すっかり　よくなりま
した。もう　じっと　しているよ
り、たくさん　歩きまわったほう
が　いいのです。
　そこで　わたしは　夜九時に
電とうを　けすことに　しました。

カラン　コロン
カラン　コロン
シー　カリカリ
シー　カリカリ



食べもの入れを　ころがす　おとや　木をかじる　おとが、夜の　しずけさの　中に聞こえてきます。それは　まるで　子もりうたの　ようでした。

（ああ、これで　あんしんだ。）

わたしは　なん日ぶりかで　ぐっすり　ねむりこみました。

「ポンちゃんが　山へ　帰る　日まで、あと二日に　なりました。

(もう　かんぜんに　なおっているようだ。でも、野生動物の　動きが　できるか　どうか。)

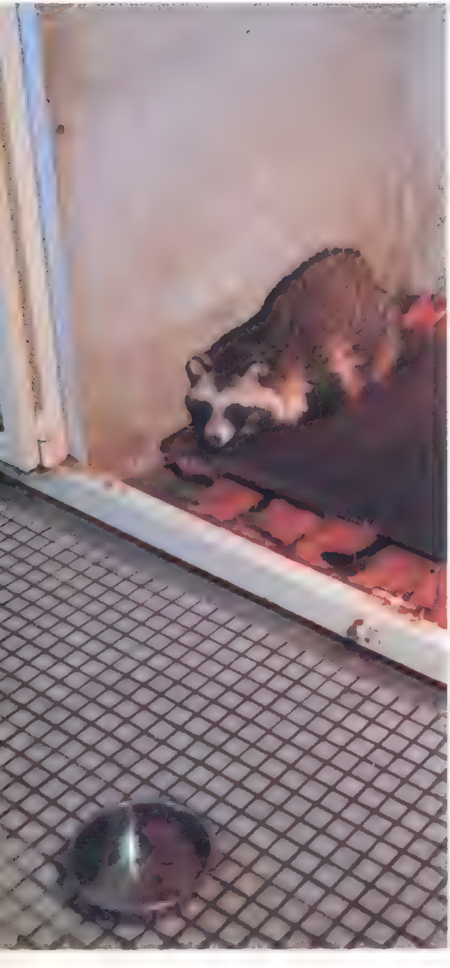
わたしは　入院している　いぬや　ねこやうさぎを　ぜんぶ　外へ　出し、入院室の通路に　ポンちゃんを　出して　動きを　かんさつすることに　しました。

通路の　はばは　一、五メートル。

長さは　七メートル。その　まん中に　ドッグ・フードを　おきました。

からに　なった　ほかの　へやの　戸を
しめ、ポンちゃんの　へやの　戸だけを　あ
けました。ポンちゃんが　へやを　出たら、
すぐに　戸が　しめられるように　ひもを
むすびつけ、外まで　のばしておきました。
十分　たちました。
ポンちゃんは　じっとしたままです。
十五分　たちました。
まだ　ポンちゃんは　出てきません。
「まだ　出てきませんか。」

ひもの　はしを　もっている　杉浦くんも
イライラしています。長い　きんちょうが
つづきました。
それから　さらに　十分ほど　たった
時です。ドッグ・フードの　ほうへ、ポンちゃんが　ゆっくり　出てきました。



「杉浦くん、しめろ！」

へやの　戸が　パタンと　しまりました。

ポンちゃんは　一しゅん　うしろを　ふりかえりました。が、すぐ　ドッグ・フードを食べはじめました。

わたしは　はじめて　ポンちゃんが　えさを　食べる　ところを見たのです。それは、こいつは　だれにも　わたさないぞ　といわんばかりの、野生動物らしい　たくましさでした。

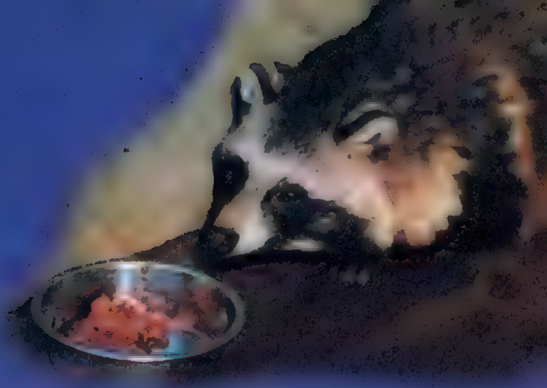
ドッグ・フードを　食べていた　ポンちゃんが、とつぜん、なにかに　むかって　とっしんしました。

通路の　はしに　小さな　あなを　見つけたのです。そこから　にげ出そうと　いうのでしょう。もうれつな　いきおいで　頭をつっこんで　いきました。

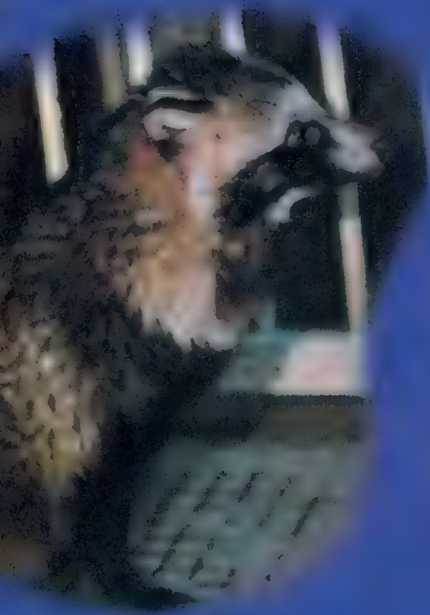
ポンちゃんの　ひっしの　すがたを　見ていて、わたしは　ふっと　かわいそうに　なりました。

（どんなに　人から　かわいがられていても
ポンちゃんは　山が　一ばん　いいんだ。
おもいきり　走りまわり、とびまわれる
自然こそ　ポンちゃんが　生きていくのに
一ばん　ふさわしい　場所なんだ。
ポンちゃん　ばかりでは　ない。動物た
ちは　みんな、自然の　中で、ある　時は
たたかい、ある　時は　助け合って　くら
していく。それが　いいんだ。人間だけに
いいように　自然を　かえようとすると、

いつか　きっと　ほろびてしまうだろう。）
わたしは　入院室の　まどに　顔を　はりつけて、いつまでも　ポンちゃんの　あばれんぼうぶりを　見ていました。



十一月八日。
あすは ポンちゃんが
山へ 帰る という
夜でした。
この 日の くるのを
まちつづけていた わたし
なのに、なんだか かなし
くて しかたが ありませ
んでした。



カラン　コロン
カラン　コロン
シー　カリカリ
シー　カリカリ

ポンちゃんは　なんにも
しらないかの　ように、い
つもの　子もりうたを　な
らしつづけています。

（この　うたも　あした
からは　聞くことが
できないのか……。
もう　すぐ　きびしい
冬が　くるというのに、
ポンちゃんは　生きて
いけるだろうか。）

そんな　ことが　頭の　中で　グルグルまわって、わたしはねむれませんでした。

ようやく　うとうとしはじめた　時には、もう　東の　空が　うっすらと　明るく　なっていました。

十一月九日。

その　日は　小林さんも　きてくれました。
いのちの　おんじんの　ことが　わかるのか、
ポンちゃんは　小林さんを　見て、
「クウン　クウン」
と　なきました。
「よかった、よかった。」
小林さんは　そう　いう　ばかりでした。
「先生、ポンちゃんに　さいごの　ごちそう
を　うんと　食べさせてやりましょう。」

杉浦くんが　いいました。
「いや、ごちそうは　少しだけに　しなさい。」
わたしは　首を　よこに　ふりました。
「どうしてですか。もう　ポンちゃんには　会えないかも　しれないんですよ。」
「できることなら　わたしも　そうしてやりたい。でも、ここで　おなかを　いっぱいにしていけば、えものを　とることを　わすれてしまうかもしれない。少しでも　早く　えものを　さがす。それが　ポンちゃ

んに　とって　いま　一ばん　たいせつなことなんだ。」

杉浦くんは　だまって　うなずきました。

わたしは　ポンちゃんの　はいった　おりを　ジープの　うしろに　のせました。

小林さん、新聞社の　人、杉浦くんを　のせて、午後一時、ジープは　川辺町に　むかいました。

川辺町
国道
41
ROUTE
川辺町
下川辺

ジープの　中では　みんな　おしだまった
まま　なんにも　いいません。
一時間ほどで　ポンちゃんが　はねられた
場所に　つきました。
（ポンちゃんは　どうして　こんな　あぶない　ところまで　出てきたのか。人間と友だちに　なりたかったのだろうか……）
そう　思うと、わたしは　ますます　ポンちゃんとの　わかれが　つらくなりました。

そこから　二〇メートルほど　さきを、左に　まがり　四十一号線から　わかれて、山道へ　はいりました。

二十分ほど　ほそい　道を　うねうねと　のぼったところで　ジープを　とめました。

秋も　おわりに　ちかい　山には、もう　つめたい　風が　ふいていました。

名古屋45
651

みんなで　ポンちゃんの　はいった　おりを　草の　上に　おろしました。

ポンちゃんが　きゅうに　そわそわ　しはじめました。

「クウン　クウン」

と　なきながら、おりの　中を　歩きまわっているのです。

わたしは　ふいに　なみだが　こぼれそうに　なりました。そんな　気持ちを　ふりはらおうと、ジープに　つんできた　テープ・

レコーダーの　スイッチを　入れ、うんと
音を　大きくしました。

しょっしょっ　しょじょじ
しょじょじの　にわは……

しずかな　山に『しょじょじの　たぬきばやし』が　ひびきわたりました。

（この　うたを　聞けば、ポンちゃんの　お母さんや　きょうだいが　むかえに　きて　くれるかもしれない。）

わたしは　そう　思ったのです。

「さあ、ポンちゃん、出るんだ。おまえのいえに　かえってきたんだぞ。」

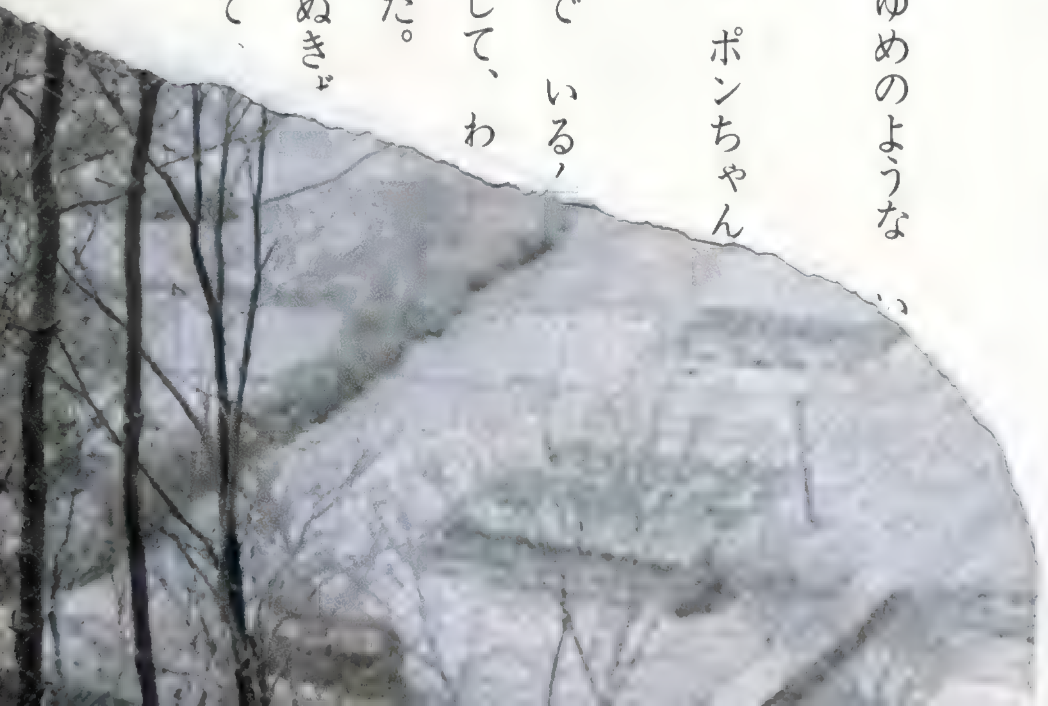
わたしは　思いきって　おりの　戸を　あけました。

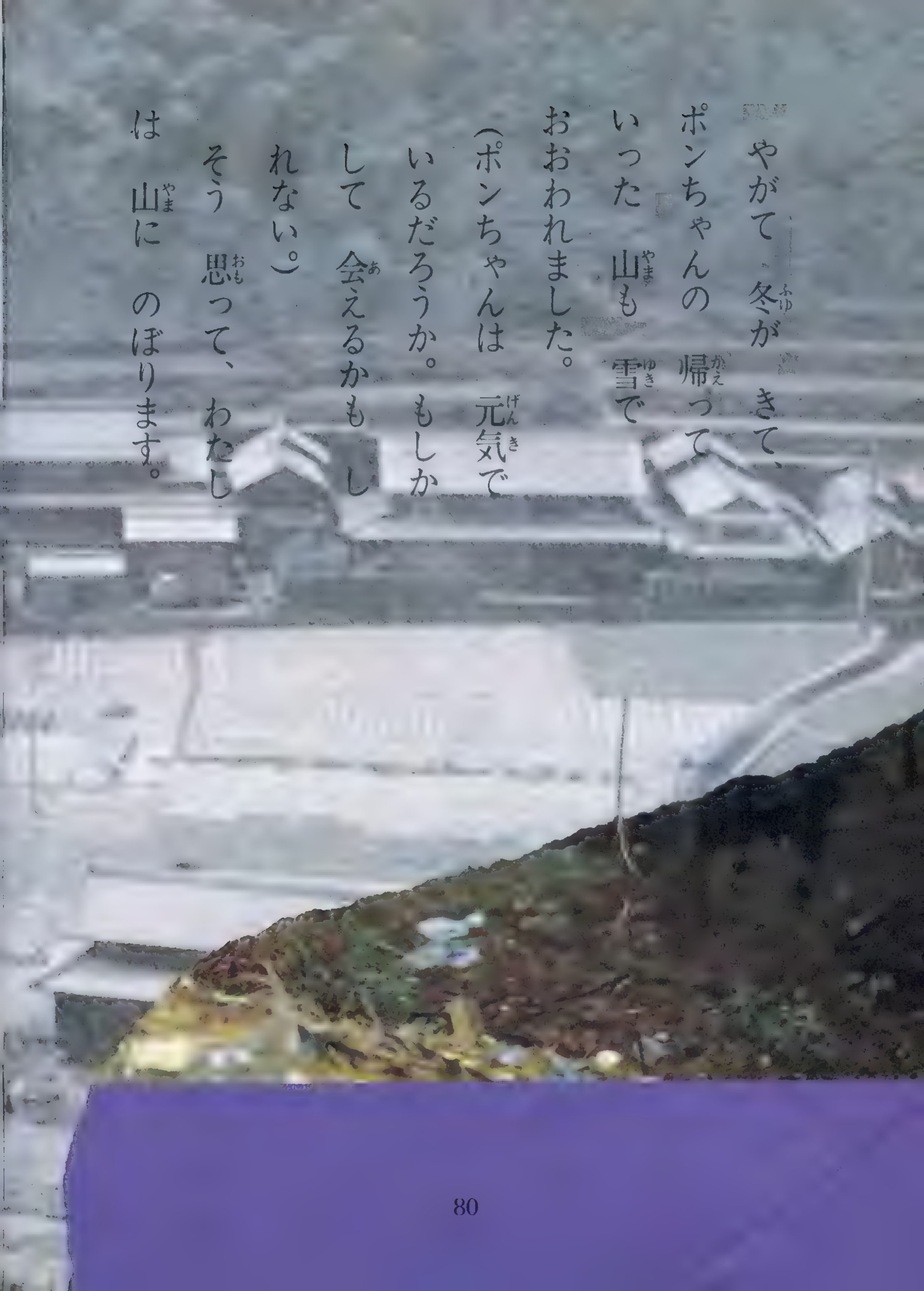
でも、どうしたと　いうのでしょう。ポンちゃんは　じっとしたまま　出ていこうとしません。キラキラ　光る　目で　わたしたちを　見あげているのです。

「ポンちゃん　出るんだ。たのむから　早く行ってくれ！」

小林さんが　おりを
たたいて、なきそうな
声で　さけびました。
　そのとたん、ポン
ちゃんは　けっしんし
たように　おりを　と
び出し、あっと　いう
まに　林の　中へ　す
がたを　けしました。

それは　まるで　ゆめのような
んでした。
わたしは　思わず　ポンちゃん
おっていました。
「ポンちゃん、元気で　いる！
そう　さけぼうとして、わ
つまってしまいました。
しょじょじの　たぬきょ
までも　なりつづけて、

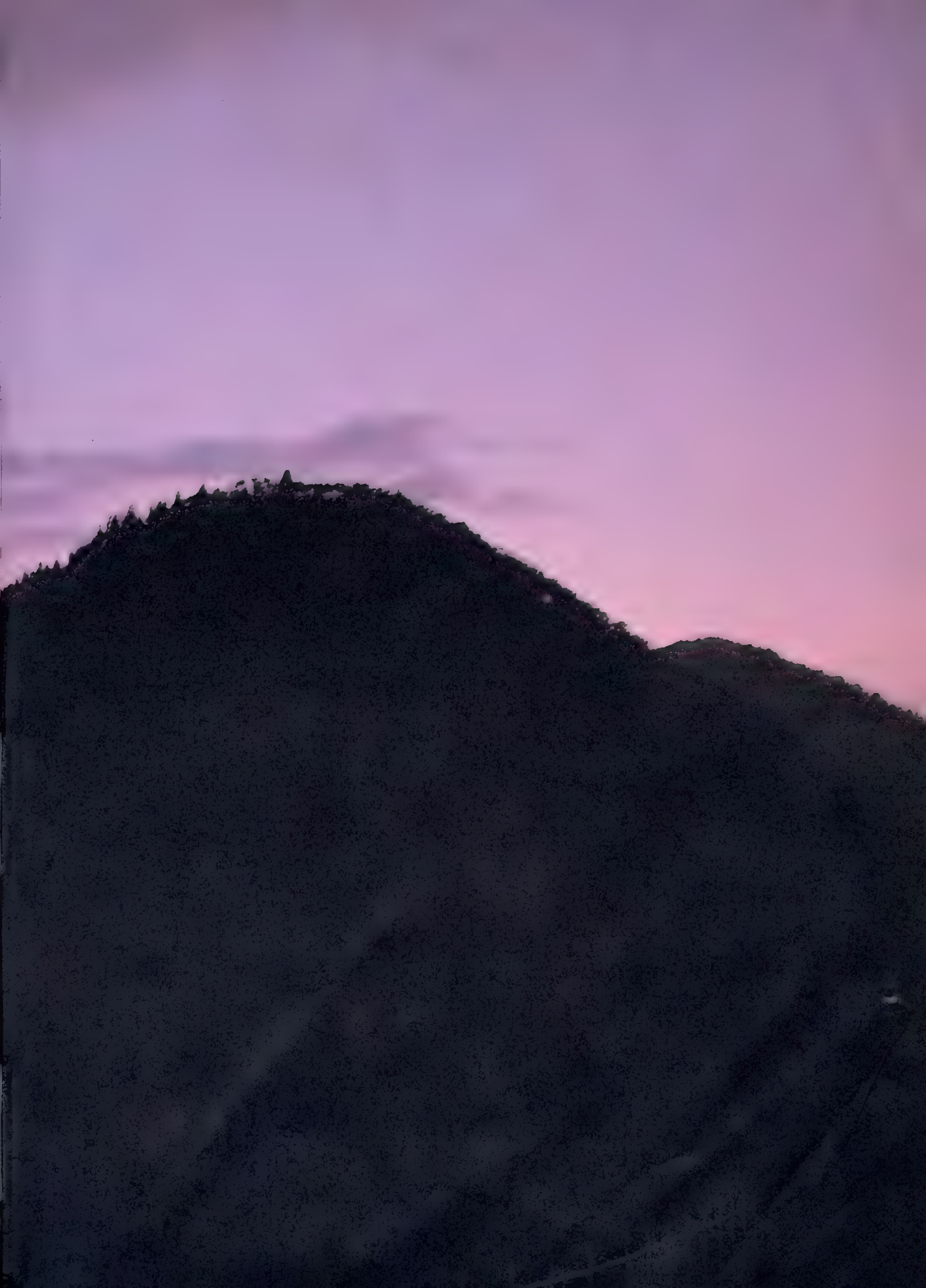




やがて　冬が　きて、
ポンちゃんの　帰って
いった　山も　雪で
おおわれました。
（ポンちゃんは　元気で
いるだろうか。もしか
して　会えるかも　し
れない。）
そう　思って、わたし
は　山に　のぼります。

しかし、どこに いるのか 足あとさえ ありません。

でも、じっと 耳を すますと、ポンちゃんの ならす、あの 子もりうたが 聞こえてくるような 気が するのです。



カラン　コロン
カラン　コロン
シー　カリカリ
シー　カリカリ

—おわり—

父母、先生がたへ、あとがきにかえて

私は小学校のはじめのころ、両親と離れて暮らさなくてはなりませんでした。さみしい生活でした。それが原因だったのか、自閉症になり、ひどいどもりにかかりました。なにか言おうとすると、言葉が口から出てきてくれないのです。

私はしぜんに人を避けるようになり、本を読んでいるか、動物と遊んでいるかの毎日を送っていました。小説の登場人物が友だちであり、フナやザリガニの息む小川や、バッタの飛び立つたんぼが遊び場でした。そして動物のお医者さんになろうか、小説家になろうかなどと夢みていました。

ところが、そうしているうちに、逆に、私はものごとに積極的になってきたのです。友だちの輪の中にも入れるようになり、学校も楽しくなりました。そこには、友だちの温い友情や担任の先生の励ましがありました。私は人間の持つぬくもりをからだ全体で感じたものでした。

夜ごと、子守唄を聞かせてくれたポンちゃんは、晩秋の川辺の山に帰りました。神経をすりへらした一か月でしたが、今になると楽しい想い出です。また、ポンちゃんのおかげで地味な獣医の仕事が、はじめてみんなに認められるという、思わぬ幸運もさずかりました。

私はこれを機会に川辺一帯の山に息む野生動物の生態観察に取り組みたいと思っています。

ここに、つたない文と写真ですが、ポンちゃんとの一か月の記録を本にまとめました。これで少年時代の夢が二つともかなえられました。

刊行に際して、多くの人のご援助があったことを記しておかなければなりません。とりわけ、児童文学評論家・西本鶏介氏には懇切なご指導をいただきました。

そして、最後に、ポンちゃんに励ましのお手紙やお金を送ってくださった全国の皆さまに心よりお礼を申し上げたいと思います。

一九八〇年　春　　　中村　志

N. D. C. 913 生きるんだ ポンちゃん
中村　ただし　文・写真
旺文社　1980
87 p.　22 cm　(旺文社創作童話)
小学低学年

(旺文社創作童話)
生きるんだ ポンちゃん

1980年3月15日　初版印刷
1980年3月25日　初版発行
(乱丁・落丁本はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください)

文・写真　中村　志
発行者　立澤節朗
印刷所　株式会社美松堂印刷所／有限会社一誠社竹内印刷所
製本所　株式会社市川製本所

発行所　株式会社旺文社
162東京都新宿区横寺町
TEL (編集) 03-266-6374
(販売) 03-266-6415

8393 694-51 0724 E
© 中村　志 1980
02107 02112
(許可なしに転載、複製することを禁じます)
Printed in Japan